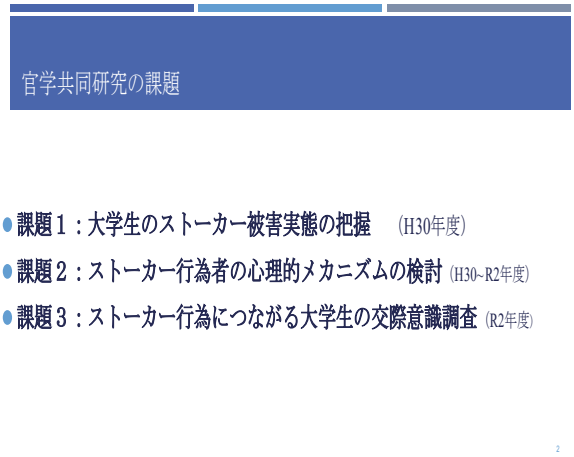
８．警察官対象「臨床心理学の視点からみるストーカー・ＤＶ事案」講義

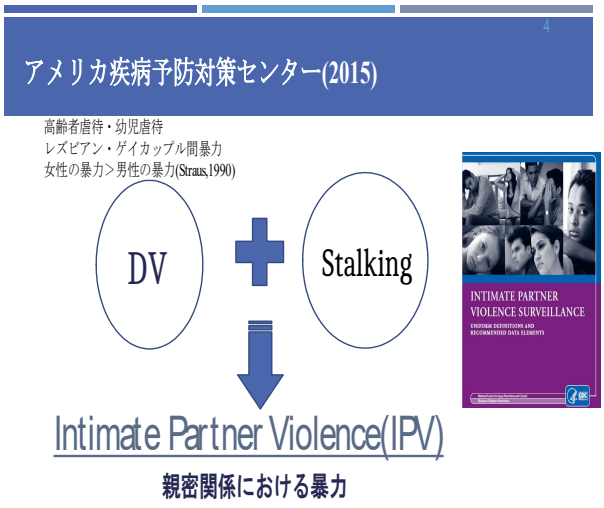
実施日：平成 30 年６月５日、同年 12 月６日、令和元年５月 27 日、令和２年９月 11 日
場所：徳島県警察学校
対象：県下各警察署でストーカー・ＤＶ事案等の捜査に従事する警察官
目的：官学共同研究の一環として、ストーカー・ＤＶ事案を始めとする人身安全関連事案に対応する警察官に対し、臨床心理学的知見を取り入れ、ストーカー・ＤＶ事案における加害者や被害者の心理などについて理解を深めるため。
内容：臨床心理学の視点からみるストーカー・ＤＶ事案　岡山県立大学（元徳島文理大学）小畑千晴

講義内容（令和２年９月 11 日実施）

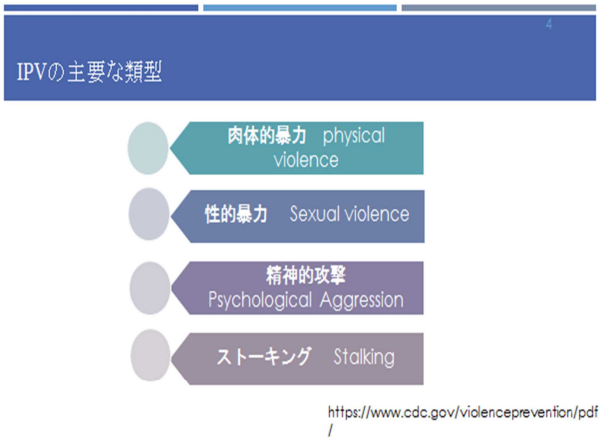


平成 30 年から３か年にわたり官学共同研究を行っています。３つの課題を設定して、被害実態の把握、ストーカー行為者の心の構造を知るための加害者面接、そして、ストーカー事案の大半は関係性のある二人の間で起こっているために、学生を対象とした交際意識調査を行うことになりました。

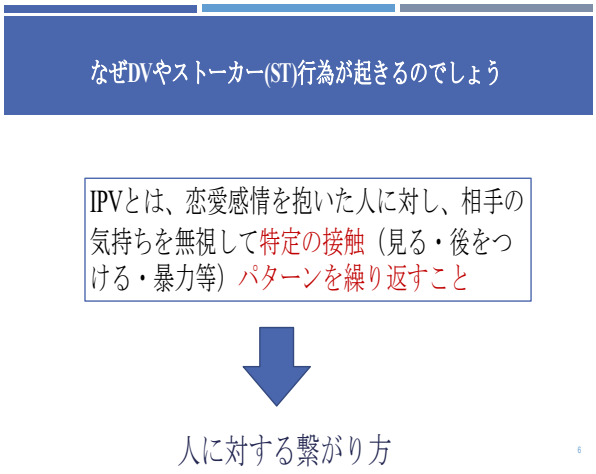
今日は、共同研究内容に触れながら、ストーカー事案と DV 事案について臨床心理学の視点からご説明させていただきます。



アメリカでは、DV とストーカー、そして虐待行為を含めて、Intimate partner Violence（IPV）と表現されています。その背景には、もともと DV は、幼児虐待や高齢者虐待を含む概念として使われてきたこと、レズビアンやゲイのカップルにも暴力があること、また男性から女性だけでなく、女性から男性への暴力もあり、性差を超えて親密な関係性の中でおこる暴力を総称し IPV と使われるようになりました。

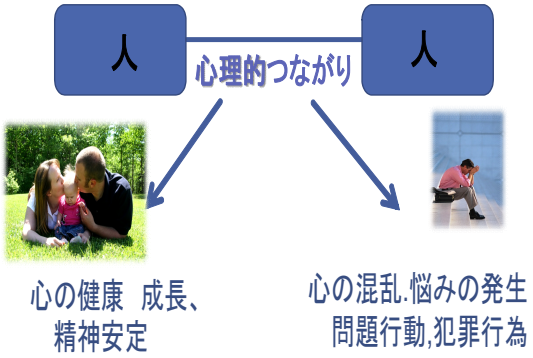


IPV は肉体的暴力、性的暴力、精神的攻撃と、そしてストーキングの 4 類型があります。



DV とストーカー行為を含んだ IPV は、なぜ起こるのでしょうか。見知らぬ人に対する肉体的暴力と、関係性のある人に対する肉体的暴力は、行為は同じでも意味が違うと考えられます。決定的な違いは、好意を持ち、親愛感情を抱いていることと、一度だけでなく、特定の行為を繰り返していることです。また、DV は相手が変わったとしても、同様の行為に及ぶことは良く知られています。そのことから、IPV は人に対する繋がり方のパターンと考えることができるでしょう。

原子価論の基本的考え



今日ご紹介するのは、一つの心理学理論で原子価論といいます。基本的な考えとして、人は、人と繋がりたいという欲求を持った存在であるということです。人は母親から始まる重要他者と安定した繋がりを築く欲求を持っていて、他者と安定した繋がりが、健康的な心の成長へと結びつく一方で、このような繋がりを築くことができない場合、人に様々な心理的混乱、障害、悩みが発生すると考えます。

原子価論の基本的考え

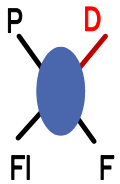
- 個人の『こころ』　『性格』　『病理』を繋がりから捉えようとする理論
- 繋がりを形成する手段を『原子価』

原子価論の基本的な考えとして、人の心や性格、心の病理を繋がりという視点からとらえようとしています。化学における原子が原子価という手によって繋がるように、人も繋がりを持つための手のようなものがあると考えています。

原子価論の基本的考え

4種類の繋がり方（手）

- 依存（D）
- 闘争（F）
- つがい（P）
- 逃避（Fl）



人間が他者と繋がるための手には4種類があり、それぞれ依存（D）、闘争（F）、つがい（P）、逃避（F１）と呼んでいます。

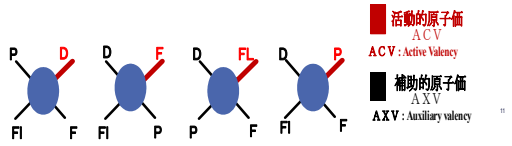
原子価論の基本的考え

- つがい（P）　相互親密による繋がり
- 依存（D）　相互依存による繋がり
- 闘争（F）　競い合うことによる繋がり
- 逃避（Fl）　距離を置く繋がり

それぞれの特徴は、つがい原子価はお互いに深く知り合おうとする相互親密による繋がりであり、依存原子価は人とは頼ったり頼られることで繋がろうとする相互依存による繋がり、闘争原子価は人とは切磋琢磨して競い合うことによって繋がろうとする手であり、逃避原子価は、人と繋がらないのではなく、距離をとって繋がろうとする特徴があります。

原子価論の基本的考え

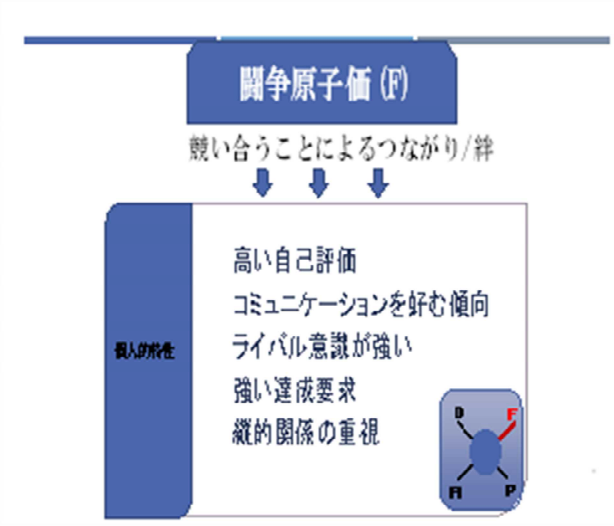
- 人には人と繋がるときに得意な手（利き手）
⇒『活動的原子価（ACV）』
- 利き手で繋がらないときに、他３つの補助的な手を使う　⇒『補助的原子価（AXV）』



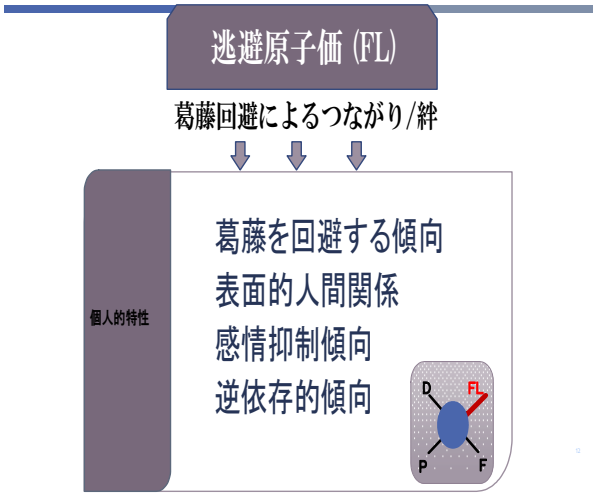
人は皆４つの種類を持っていますが、人との相互作用において、もっとも頻繁にかつ瞬間的に示される繋がりをここでは活動的原子価と呼びます。たとえて言うなら、自分にとって出しやすい手、利き手のようものです。

この利き手である活動的原子価で人と繋がらない時には、他の原子価を使うので、補助的原子価と呼びます。

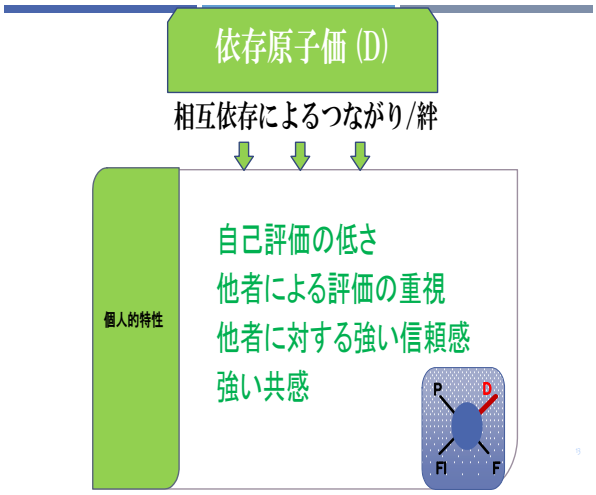
健康的な人、すなわち正常で、安定した人間関係を築き、自分の社会的環境に適応出来る人の場合の原子価の構造は、図のように１つのＡＣＶと３つのＡＸＶによって構成されています。



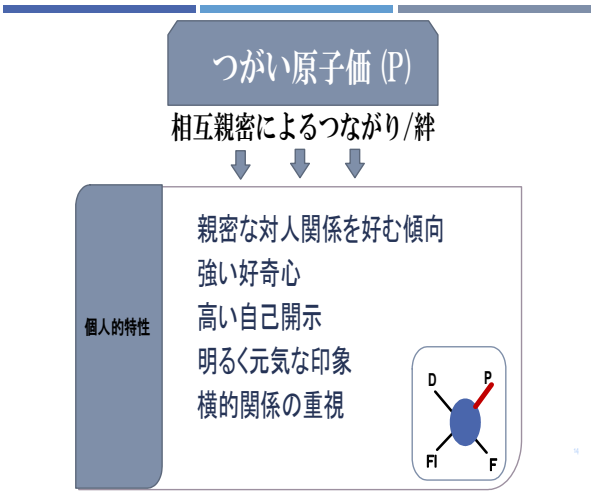
活動的原子価がFVを持った人のつながり方は、衝突、相手との競争することによるつながり方です。攻撃することが相手とつながる実感として感じられるタイプです。積極的な自己主張、自己表現、批判、衝突が人とつながりが唯一の手段だと信じている。このタイプは、高い自己評価とコミュニケーションを好む傾向が高く、自分がそうだから、きっと相手も意見を持っていて当然と信じています。また常に目的を設定し、その達成に向けて努力する特徴や人との関係は上下関係、先輩後輩などの縦的関係を重視する傾向がみられます。



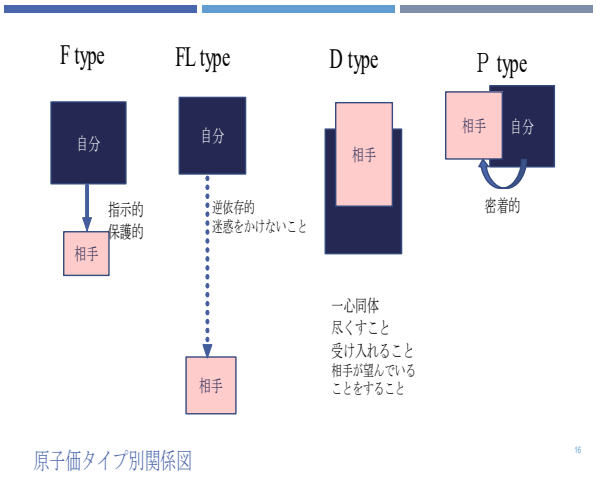
このタイプは、衝突の結果起こる葛藤を避けるために、人と距離をとって繋がろうとする特徴があります。自分の人間関係を危険にさらす可能性のある葛藤を含む状況や条件を好まないので、人とは表面的な関係を好みます。人とは、一定の距離をおかないといけないという信念があるので、さまざまな感情が表れる人間関係や協同活動に深く関わることを避ける傾向があります。人と感情的に関わると、葛藤が生じ、関係が破壊されると思っているからです。そのため、自分の感情を抑制し、喜怒哀楽を見せないようにしたり、人にできるだけ頼らないよう逆依存的傾向を示します。



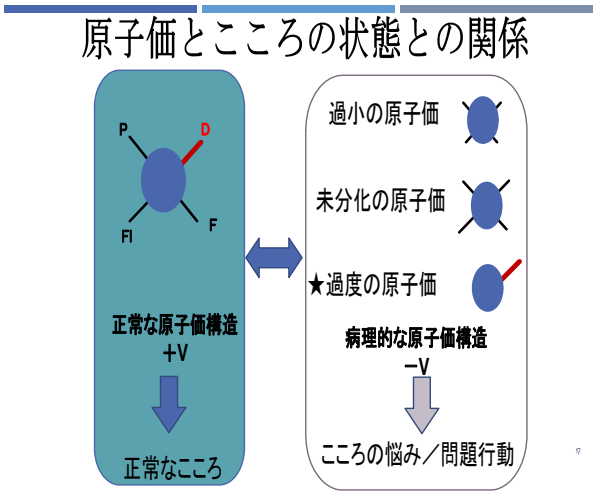
このタイプは、自己評価が低いために、1 人では生きていけないと感じているので、人とは頼り頼られる互いに依存しあうことによって繋がろうとする特徴があります。他者から受け入れられるために、常に相手からの評価を気にしたり、自分よりも相手の意見を尊重、信頼する傾向が強いことが側面があります。また人の弱さに敏感なため、共感能力が高い傾向もあります。



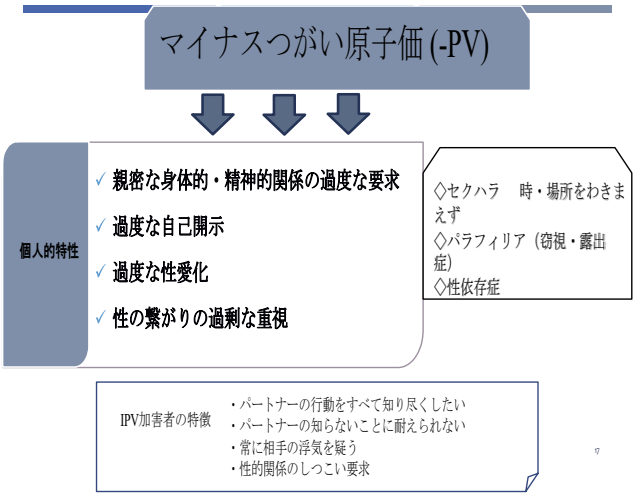
相手とは強い好奇心をもち、互いが深く入り込み、お互いの内的な世界を知り合うことによってつながろうとする特徴があります。このタイプは、高い自己開示と相手を知りたいという欲求が強く、また明るく陽気で、前向きな特徴があります。また人との関係では横的な関係を望み、すぐに友達を作ったり親しみやすい特徴も持っています。



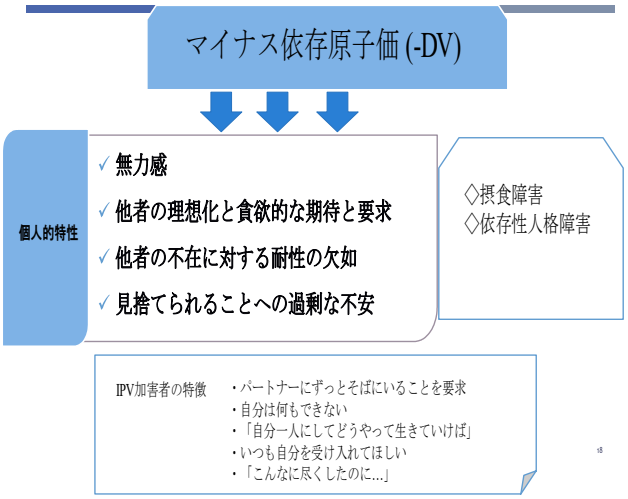
各タイプの人との関係性を図式化するとこのようになります。闘争は自分が主で相手に指示や保護をすることによって縦的関係を築こうとします。逃避は、同様に相手より自分を主としていますが、自分と相手との関係は距離があり、できるだけ相手が近づいてこないようにします。依存は、相手に支えられて自分がいると感じているので相手が主となります。つがいは、相手と自分は対等で且つ密着的な関係を築こうとします。



正常な原子の原子価は、１つの ACV と３つの AXV という構造によってあらゆる社会的・対人関係的状況に適応し、人との安定したつながりを築くことができますが、欠如している場合に、精神的な成長や安定にかかせない人とつながっていくための能力が見られなくなります。つまり、人との関係を破壊していく状態に相当するものです。その中で過度原子価と呼ばれる１つの手だけしかもたない場合、つまり、相手のニーズを考慮せずそれだけを強烈に表現する特性についてご説明します。

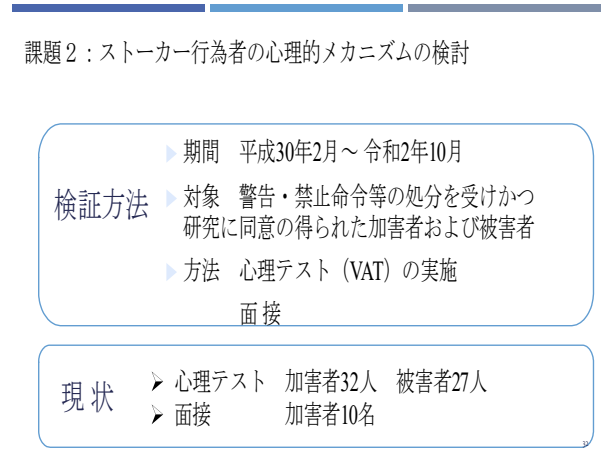


−PVは、親密な身体的かつ精神的関係を過度に要求する繋がり方を示します。つまり、相手を無視して、一方的に知り尽くしたいという要求をもっています。自分が相手について知らないことがあるということに耐えられず、お互いがお互いのすべてを知っているという関係を求めています。セクハラやパラフィリアにみられる、相手の同意なく、自分の性的衝動を一方的に満たそうとする行動として表現されます。ストーカー行為と深く関連していますが、−PVが引き起こすストーカー行動は、相手を知らずにいられないという欲求が源になっていると考えられます。

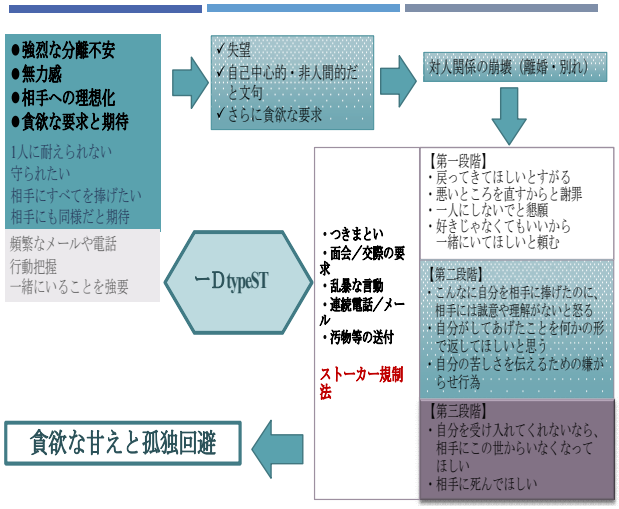


－DV は、常にだれかと一緒にいたい、誰かから守られたいという要求が強く、また人から見捨てられることに過剰な不安を持つ傾向にあります。

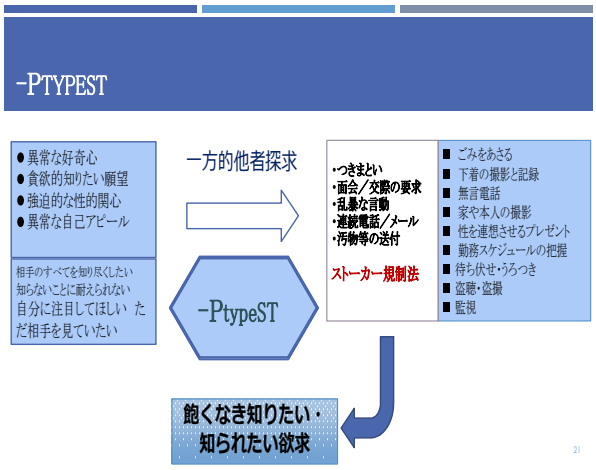
他者といつも同じでいることが重要だと考え、さらには相手の気持ちと自分の気持ちが区別できず、自分自身を失うくらい相手に完全に同一化する特徴があります。そのため、パートナーとの関係においては、献身的に尽くし、相手が離れていかないよう、相手が傍にいることを強く要求しますが、結果的に相手は負担を感じて、離れようとすると、引き留めるためにストーカー行為を示す場合があります。



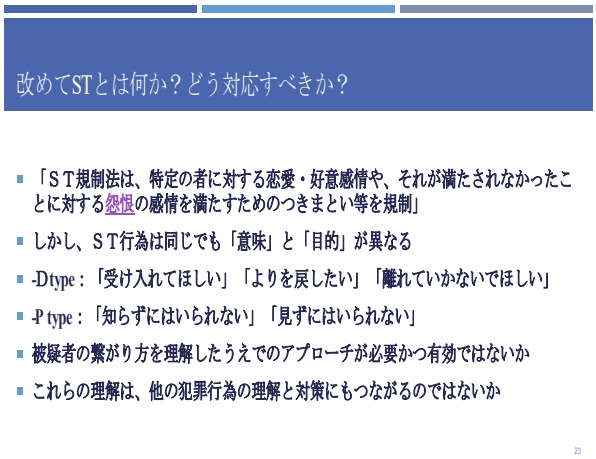
原子価論という立場から、ストーカー行為について行為者の心のメカニズムを検討するために、徳島県において警告・禁止命令などの処分を受け、研究に同意してもいいと回答した加害者と被害者の方に、心理テストを実施しました。さらに加害者の方で同意を得た方に面接を実施しました。その結果、ストーカーは大別すると２パターンがあること、どのような心理的過程によってストーカー行為へと繋がるのかが明らかになってきました。



１つ目は－DVの加害者が引き起こすタイプです。その特徴によって、交際中には献身的に尽くし、相手が離れていかないよう努力します。しかし、関係継続とともに相手が負担を感じ別れ話を切り出すと、最初は、相手に戻ってきてほしいとすがり、それでも受け入れてもらえない場合、こんなに自分を捧げたのに何かの形で償ってほしいと脅すような行動へとエスカレートしていきます。最終段階として、相手や自分自身を傷つけることを通して自分の寂しさをアピールするような行動をとる場合もあります。この場合の、ストーカーの目的は、貪欲な甘えと孤独回避だと考えられます。



－PV の場合は、－DV と異なり対象は、関係性がないか見知らぬ相手に対してストーカー行為を行う場合が多いようです。その特性から、一方的に相手に好意を抱き、相手を知るために、撮影したり、周辺をうろついたり、時にプレゼントを渡すなどの行為を示すようになります。－PV は楽観的でもあるために、相手もきっと自分のことが好きに違いないと感じたり、警察から注意を受けたとしても相手の本心じゃないなどと思い、繰り返しストーカー行為をする場合がみられます。従って、－PV の目的は、飽くことがない相手への知りたい欲求と自分を知ってほしい欲求が源になっていると考えられます。



研究を通じて、ストーカー行為にはタイプによって行動の意味が異なることがわかってきました。－Dtype の場合には、基本的には関係性のあった元交際相手に対して行われる場合が多く、ストーカーの目的は、自分を受け入れてほしい、一人にしないでほしい、離れていかないでといった甘えと孤独を避けるためであり、－Ptype は、好意を抱いた相手に対する知りたい欲求がその目的となっているようです。加害者の心を一定程度理解することが、対応や今後の予防にもつながると考えます。またこうした理解は他の犯罪行為にも応用できるのではないかと考えています。